
きみと出逢うための

五塔 寺桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみと出逢うための

【Nコード】

N1708Y

【作者名】

五塔 寺桃

【あらすじ】

それは、あまりに突然の出来事だった。 / / / 一足先に元の姿に戻った志保さんと、おあずけを食らっているコナン君のお話です。「新一にとって蘭は元々恋愛対象ではない」という捏造設定がベースになっていますので、新蘭派の方は迷わずバックでお願いします。CPはコ志風味↓新志の予定です。

01（前書き）

基本設定：新一くんは蘭ちゃんに恋愛感情がまったくない。
キャラなどかなり捏造入っていますので、原作至上主義の方には肌に合わないかもです。

それは、あまりに突然の出来事だった。

*

冷たい外気から身を守るようにコートの前を合わせ、寒風から逃れて二階へ上る階段を駆け上がる。

いつものように探偵事務所の扉を開けると、窓辺で物思いに耽る蘭の姿があった。

ただいま、と子供らしく高い声で呼び掛ける。

こちらに気付いた蘭は憂い気だった顔に笑みを浮かべて、おかえり、椅子から立ち上がってコナンを迎えた。

「なんかボーっとしてたね？どうしたの、蘭姉ちゃん？」

「え、そうかな？なんでもないよ。それよりコナン君、何か温かいもの飲む？外寒かったでしょー」

「やったー、ありがと蘭姉ちゃん」

このところ考え込んでいる姿の蘭をよく見掛ける。

高校二年生の冬、一般的に考えれば今後の進路でも悩んでいるのだろうか。

本来ならばおそらく自分がまっさきに相談されていただろう悩み事を思うと、少し気がかりだ。

コートを脱ぎ部屋にランドセルを置いて事務所へ戻るとすでにテ-

ブルにホットミルクが用意されている。
頂きます、と声をかけてマグを手にとる。

「受験のこととか考えてたの？」

「え？」

「最近、よくそこから外見ながら何か考えてるじゃない？受ける大学とか悩んでるの？」

「やだ、コナン君たらあたしの同級生みたいなこと言うんだから、小学生なのに大学受験のこととかちゃんと分かってるんだねえ、さすがコナン君」

目を見開く蘭の反応に少し普通に話すぎたかと焦るが、普段から大人びた会話に口を挟んでいるからか特に怪しまれることはなく、却って関心されてしまう。

内心で胸を撫で下ろし、何を悩んでいるのか聞き出そうとするが、反して蘭はさきほどと同じように視線を床に投げて眉を寄せた。

「……受験のこととかは、そんなに悩んでないの。あたしが考えてたのは、新一のこと」

突然出てきた自分の名前に、口に含んだホットミルクを吹き出しそうになる。

寸でのところで堪えて、咳払いをひとつ。

つい先日メールしたばかりだし、特に安否に関して心配させるようなことはないはずだ。

様子を伺うようにしながらもう一度マグを持ち上げる。

蘭は独り言のように、続きを呟く。

「もうすぐ終業式で、そしたら三年生じゃない？去年新一がいなくなったの、ちょうどその頃だったの。」

もう一年も経つんだなあっていうのと、ずっと休んでて進級できるのかなあっていうのと。……それから、

「それから？」

元の身体に戻れない身では進級のことなどあまり現実味を持って考えていなかったので、こちらが目から鱗だった。

正直なところ今一番気がかりなのは元に戻るか否かということで、学業のことは二の次だ。

久々に現実に戻された気がして、ああそうかそういう問題もあったなと考えながら次を促す。

蘭は照れ臭そうに笑った。

「これ、新一には内緒ね？去年失敗しちゃったバレンタインのチョコ、今年は事前にちゃんと練習して上手に作るから、食べてほしいなあって」

へえ、と相槌を打つ。

世の中はすでにチョコレート商戦で賑わっているが、バレンタインそのものはまだ一ヶ月も先である。

蘭もいつちよまえに女子やってんだな、とか、俺にばっか作ってるからいつまでたっても彼氏ができないんだとか、楽しそうに話す蘭を眺めながら色々と感想を持つ。

ともあれ、一年近くどことも知れないどこかをほつつき歩いている幼馴染をいたく心配してくれているということが分かり、コナンは心がホッと温まるのを感じた。

まったくいいヤツだ、これで喧嘩っ早くなければ彼氏くらいすぐにできるだろうにと、こちらはこちらでいらぬ心配をする。

とりあえず元に戻ったら何かお礼をしなくてはならないなといつかの話を頭に思い描き、コナンは飲み干したマグをテーブルに置いた。

「それじゃ、ちょっと僕、博士んち行ってくるね」

「あら、博士つて今、哀ちゃんと旅行中じゃなかった？」

「先週みんなでゲームやりに行ったときに忘れ物しちゃってたんだ。合鍵持ってるし、とってくる」

「そうなんだ。暗くなる前には帰ってくるのよ？」

「はい」

忘れものというのは口実で、その実、子供の振りをせずに過ごせる唯一の空間として博士の家は大変に貴重な場所だ。

蘭の言うとおり、博士は先週末から灰原を連れて旅行中であり、珍しく博士の家には誰もいない状態だが、コナンには以前灰原の看病の際に手に入れた合鍵がある。

当の住人たちはそのことをすっかり忘れているようだが、二人が旅行中とは言えコナンにも息抜きは必要だ。

気に入りの推理小説でも持ち込んでゴロゴロ過ごそうと企んで、コナンは探偵事務所を足早に後にした。

途中、人が住まなくなつて一年近く経つ我が家の前を通り過ぎる。そろそろ手を入れないと、戻ったときに本格的に大掃除をする羽目になるなと物憂げな息が出てしまうのは仕方がない。

それも当面は杞憂だろうと——そもそも、灰原の研究が完成しないと元に戻ることもすらかなわないのだから、要らぬ心配だ——、頭を振って博士の家の門を潜る。

自宅の鍵と、探偵事務所の鍵が付いたキーホルダーに、もう一つ加わる変わったかたちの鍵。

鍵穴に差し込み錠を開け、人がいないことは分かっているが「邪魔するぜ」と一声かけてから玄関で靴を脱ぐ。

さてまずは暖房でもつけなければと思いつながらリビングへ向かいながら、ふと異変に気付いた。

廊下の先から、光が漏れている。

まさか電気を就けっ放しで出て行ったのか？

訝しみながら一歩進む。

コートを脱ぎかけたところでもうひとつ気付く。

数日人が空けていた家にしては、温かい。

外気と同じようにキンと冷えた空気を予想していた肌は、思いの外温かい室内に警戒を緩めているが、反してコナンの神経は総毛立つ。

何かがおかしい。

何者かが、この家にいる？

自らの存在を主張するように声を掛けて家に入ったことを後悔しながら、コナンは静かにリビングへ近づく。

音が立たないように廊下の先の扉を開け、室内を覗き込み――

飛び込んできた光景に、息を呑んだ。

心臓も、一瞬止まったかもしれない。

「……はい、ばらっ。」

今ここにいるはずのない、赤茶の髪をした。

妙齡の女性が、ゆったりとソファに腰掛けていた。

01（後書き）

5年ぶりくらいにマトモにお話を書きました。勘が鈍ってますので
お見苦しい部分もあるかと思いますが、なんとなく雰囲気を読んで
いただければ幸いです。

肩にかかるかかからないか、切りそろえられた赤茶のウェーブヘア。白磁器かと思うほどの透明感の肌。薄い色の瞳は気だるげな瞼と長い睫に覆われて。

上げ連ねればきりのない共通項。

だけれどそれが“彼女”であると信じられない、その訳。

「はい・・・ばら？」

驚愕に震える声で、“彼女”であるはずの名前を呼ぶ。

ゆつくりと顔、続いて視線が持ち上げられ、まっすぐにこちらへ向けられる。

あら、何でもないように肩を竦めた彼女は、読んでいた雑誌を脇へ置いた。

「どうかした、工藤くん」

「どうかした、っておま、」

「博士とわたしは今旅行中の筈なんだけれど？どうしてあなたがうちの鍵を持っているの」

「いやこれは前に博士がくれてっつーかそれよりお前、」

「いやだわ不法侵入みたいじゃない。人のうちに上がるときはインターホンくらい鳴らしてちょうだい」

「誰もいないって分かってる家にピンポン押す人間がどこにいるんだよっつーかお前その姿、」

「言っておくけどここはあなたの家じゃないのよ？あなたの家は隣。何我が物顔で入ってきてるの」

「つーーーーーか人の質問答えろお前！！！」

反論しようとするれば語を被せてくる彼女に苛立ちコナンは声を荒げた。

いちいち丁寧に戻しては話が進まない。

何かしらと何食わぬ顔でソファに腰かける彼女を指さして、コナンは最大の疑問をぶつけた。

「何なんだよその姿は！いつ戻った！ってか旅行どーした旅行！！」

この際彼女が旅行に行っていなかったことなど大した問題ではないのだが、混乱した頭は浮かんでくる疑問を素直に放り投げた。

目の前にいる彼女。

外見上の特徴も、言葉選びも、纏う雰囲気もすべてが“灰原哀”であることを主張しているが、一目見て異なるのはその身体の大きさ。百二十センチにも満たなかった小さな身長は目測で百六十センチは越えているし、顔立ちからも幼い頬の肉付きが消えている。

すらりと伸びた両手足に、衣服の上からでも分かる胸の膨らみ。

認めざるを得ない、彼女は元の身体に——宮野志保に、戻ったのだ。

喚きたてたコナンから視線は外さず、ひよいとだけ肩を竦めて志保は口を開いた。

「この姿できちんと会うのは初めてね。宮野志保よ、初めまして。戻ったのは今朝。旅行は嘘で博士は今頃徳島の学会に出席してるわ」

律儀にすべての質問に答えた志保は、他に質問は？と言わんばかりにコナンの様子をうかがう。

混乱を御しきれないコナンは二の句が出ず、額に手を当ててしやがみこんだ。

事態について行けず、頭痛がして来た。

なんだそれ、意味わからん、呪いのように低く呟くコナンに、志保は腕組みをしてため息を吐いた。

「……大体ね、あなた来るの早すぎるのよ。博士が帰ってきてからきちんと説明する予定だったのに。順番が狂ったわ、わたしだってびっくりしてるのよ」

「びっくりとかまあそりやそうなんだけど……むしろそれよりお前、先に俺に言うことがあるんじゃないかねえの」

「ん？」

困った子供に言い聞かせるように言葉を続ける志保に、ガクリとなだれたままのコナンが不貞腐れたように言う。

きょとんとして、こちらを見つめる志保を、睨み上げるような恰好でコナンは指摘した。

「解毒剤。いつの間に完成してたんだよ」

俺、一言も聞いてねえぞ。

恨み節には非常に心がこもっていて、しゃがんだ体勢から放たれた低い声は何だか可愛らしくて志保はつい吹き出しそうになる。

身体の大きさが変わっただけで、こうも見えるものが違ってくるの

かと不思議でなかったが、可愛らしく見えてもこの少年の問いは本気から来るものだから、はぐらかすことはできない。

元より、自分の罪の被害者である彼を欺くつもりなど、毛頭ない。とりあえず、そんなところでにしゃがんでないで掛けなさい、と傍の椅子を指すと、コナンは渋々ながらそれに従う。

リビングセットの椅子にコナンが座るとようやく視線の高さが合った。

「隠していたつもりはなかったの。ただ、きちんと完成してからあなたに報告したかった」

「なんでだよ。今までは試作品でも出来たら教えてくれただろ」

「試作品じゃないからよ。もう今までみたいな半端なものではないの。これが成功なら、もう二度と子供の姿にはならなくて済むわ」

伊達眼鏡のフレームの奥から彼女を真正面に見据える。

姿は元の１８歳に戻っても、芯の強い揺るがない姿勢は子供の姿のそれと何ら変わらない。

今ここにいる彼女が本来の姿なのだから、灰原哀と宮野志保が纏う空気がイコールなのは元々なのだ。

その凜とした背筋からは自信が伺えて、けれど彼女の口から出る言葉に言い知れぬ違和感を感じてコナンは顎に手を添えた。

彼女の発言に足りない一語。

それにたどり着くのに、さして時間は掛からない。

「……」これが成功なら？おめー、成功したから飲んだんじゃねえのか？」

試作品ではないと彼女は言った。

けれどこれが完成品であるとは言わなかった。

言ったのは、“完成してから報告したかった”ということだけ。

それが意味するところは、つまり。

コナンがたどり着いた事実には、志保は眉間に指先を当てて溜息を吐いた。

これだから敏い人は。

さも面倒そうに前置きをしてから、志保は告げた。

「これは最終確認のための実験なの。わたしがこの姿で当面問題なければ解毒剤は成功。そうしたらあなたに渡そうと思ってたの」

胸に手を当てて自分が最後の実験体であることを告白した志保の表情からは、悲壮感や罪悪感といったマイナスの感情は読み取れず、事実を事実として告げているだけと主張している。事務的な言葉の羅列に紛らわせられそうになるが、それに流されまいとコナンは一呼吸の後、ちよつと待てと制した。

「お前……自分の身体で実験してるってことか？」

「ええ。今、そう言ったつもりだけれど」

「何だそれ、ふざけんじゃねえ!!」

ガタン、と椅子を蹴倒す音がリビングに響いた。

無音が空間を支配する。

いきりだつて立ち上がったコナンと、それすら予測していたように努めて冷静な志保。

正反対の様子の少年と女性の構図は端から見ればそれは奇妙なものだろう。

その奇妙な構図の中、距離は保ったままコナンは傍のテーブルに拳を乱暴に叩き付けた。

「なんでそんな危険なことすんだよ、自分のこと大切にしないんだよ!なんで一言の相談もなしに、そんな……!」

ああまったく、本当に彼は優しいと志保はその様子を眺める。

元はと言えば自分がおかしな薬なんて作るから彼は貴重な青春時代を削られているというのに、その元凶である張本人を心配するなど、いつも不思議で仕方がない。

けれど世の中に温かい人間というのは確かに存在して、不器用ながらも彼はそのうちの一人なのだろうということは、最近分かった。だから、彼が今怒っているのは、自分のためなのだということも、志保には分かる。

分かるけれども、そこは譲れないからこうすることを選んだのだ。

「ありがとう」

怒鳴る少年に対して微笑むと、彼は決まり悪そうにポケットに両手を突っ込んだ。

分かってんなら、とりあえずいいんだけどよ。

言外に含んだ色々な意味を汲んでくれたらしい。

いわずとも伝わるこの関係は何だろう、ひどく心地良い。

微笑みはそのままに、志保は続けた。

「心配しなくても、失敗はしないわ。服用前の時点で100%成功みたいなどころまで持ってってるから。だけどやっぱりね、あなたに服用させるには、200%の状態まで持っていきたいのよ。分かって」

どうしたって、これ以上彼を危険に晒すわけにはいかないのだ。

早く戻ることを彼がどれだけ望んでも、納得ができるまで、確信ができるまで、彼に薬を渡すつもりはない。

小さな背中が志保に向けられる。

天井を仰ぎながら、廊下のドアへ向かうその背は、拒んでいる訳で

はなく、ただ戸惑っているように見えた。

「……上、借りるぜ」

リビングを立ち去るコナンを志保が呼び止めることはなかった。

傾きかけた陽が部屋に少しずつ差し込む。

受け入れられずとも意思を曲げるつもりはないが、きっと彼は分かってくれる。

ただ、図らずも驚かせてしまったことを心で詫びながら、志保コーヒーを淹れにキッチンへ向かった。

気分を落ち着かせた頃には、また降りてくるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1708y/>

きみと出逢うための

2011年11月14日14時11分発行